

ジャニーズ社長「弔花の序列」 ああ、有名人の葬儀は大変だ

死めまです 死ぬほど SEX 世界史を変えた「淫乱女」の性愛術 皇帝を骨抜き「ローマ式口淫」 ショパンを魅了「神の乳房」



20バズ眼福シバ観 人巨乳会議 奈月セナ



清水あいら 童貞悩殺 おっぱい



畑中葉子 遠磨ヌード アンコール



温泉ビキニ 関根優那



宮迫博之「闇営業引退」で 違約金どうなる

袋とじスペシャル ヘアヌード営業会議

2019 Aug. 8.2 定価450円

お金と健康 逆算の老後計画

全部やらなきゃで医療費破産、まだ大丈夫で重病見落とし 年齢別早見表

最新制度対応 2000万円貯める「書き込み式」資産管理シート

その対策 何歳から始めるのが正解です タイミングを間違えたら「人生の不良債権」に

年金 退職金 健康保険 相続 自宅の処分 受給開始は「65歳」、遺言作成は「60歳」、老人ホームは「80歳」

不買運動の韓国人が「本当は欲しくて仕方ない日本製品」

日韓断交で韓国経済は大崩壊！

「日本経済に大きな被害を与える」文在寅の「天ツバ」を唾う

「プロ野球」大連敗の謎 敗軍の将が明かす蟻地獄の日々 マルサも重大関心、貴景勝の父「2700万円強奪騒動」の真相 恥を知れ」と叫びたい「破廉恥」参院選「6つの怨念」

増えるばかりの「パスワード」、流出も忘れるのも怖い。どうすりゃいいの？

京都アニメーション放火事件 緊急詳報

大統領

データで 徹底比較

日本VS韓国「国力50番勝負」

軍事、経済、教育、スポーツ、文化

輸出規制発動までの7か月で練られた「官邸極秘シミュレーション」をスクープ公開

10

「健康も「いつやるか」が大切です」

「正しい受け方」ガイド

検査を

か 年齢別早見表



「何歳から始めるべきか」が重要なのは42〜51歳で特集した老後資産だけでなく、医療・健康に関する対策でも同様だ。早期発見のために「若いうちからあらゆる検査を受けなければ……」と考えれば、多額の検査代で「医療費破産」を招きかねない。しかし、「お金ももつたいないし、受けなくても大丈夫だろう」と高を括っていると重病を見落としてしまふかもしれない。検査の名医が「どの検査を、何歳から、どれくらいの頻度で」受けるべきかを教えてくれた。

### 胃カメラより大腸カメラが先

「先生、自治体の検診だけで大丈夫なのでしょうか」  
「がんが不安なので、毎年人間ドックを受けたほうがいいですか」

検査の専門医のもとには、そうした相談が日々、寄せられている。人間ドック・検診を数多く手がける東京国際クリニックの宮崎郁子副院長が語る。

「自治体や企業の検診は最低限のもので、早期発見のためには足りない項目がいくつもあります。毎年欠かさず受けていてもそれだけでは心許ない。

まずは病気にかかりやすい年齢（好発年齢）を知り、

人間ドックやオプション検査の必要な項目を選択することが大切です。持病や既往歴によっても異なるものの、必要な年齢から、適切な頻度で受けるための目安を把握しておきましょう」  
では、50代を迎えたら「どの検査を」「何歳で」受けるべきなのか。

なるべく早くから受けておきたいのが「大腸内視鏡検査（大腸カメラ）」だ。

日本消化器内視鏡学会の専門医で、住吉内科・消化器内科クリニックの倉持章院長が解説する。

「大腸がんの罹患率は40代から急増し、45〜49歳にな

ると40代前半に比べて、がん化する可能性のあるポリープが約2倍に増えるという海外の研究があります。

内視鏡でがん化する前のポリープも見つかり、大腸がんを未然に防ぐことにつながるため、できるだけ若い年齢から受けておきたい。最初に受けて異常がなければ、その後は5年に1回程度で良いと考えられます」  
画像診断を専門とするAIC八重洲クリニックの手塚大介医師（医学博士）は、50代からの「心臓MRI」「頸部エコー/心エコー」の重要性を説く。

「心臓MRI」は、心臓の筋肉の状態を診る検査で、心筋梗塞の早期発見に有効です。急性心筋梗塞は30代でも発症し得るので、症状がなくても50代からは2〜3年に1回は受けてたい。

「頸部エコー」は、ごく初期の動脈硬化も捉えられるため、動脈硬化のリスクが高まる50代以降は3〜5年に1回程度受けておきたい。「心エコー」も同様に受診することで、自覚症状

# 「逆算の老後計画PART② 健

## 人間ドック&検診の名医、が教える

# 「何歳で」「どの 受けるべき



のない心臓弁膜症を診断できず

50代から罹患率・死亡率が急増する胃がんについて、前出・倉持医師は「少なくとも55歳までに一度は『ピロリ菌検査』を受けておくべき」と語る。

「世界各国の研究で、ピロリ菌は9割以上の胃がんの原因であることがわかっている。55歳を目安にピロリ菌の有無を調べておけば、その後の検査の方針の目安になります。

結果が陽性なら、それ以降はピロリ菌を除菌した上で、『胃内視鏡検査（胃カメラ）』を最低でも3年に1回は受けましょう。検査が陰性で注視すべき病変がない場合、内視鏡の頻度は5年に1回程度でも良いと考えられます」

50代から罹患率が高くな

る肺がんは、「遅くとも55歳には『胸部CT』を受けておきたい」（前出・手塚医師）という。

「肺がん検診は、『胸部X線検査（レントゲン）』や『喀痰検査』を実施する自治体が多い。しかし、これらの検査では早期の病変を見つ

### 1年に1回か、2年に1回か

60代以降、とくに重要性が高まるのが『脳MRI/MRA』だ。くどうちあき脳神経外科クリニックの工藤千秋医師が解説する。

「MRIは脳の断面図を映す検査で、脳梗塞を起こしている血管の詰まりなどが白い影となって映ります。MRAは脳の血管を立体的に映し出し、くも膜下出血の原因になる未破裂動脈瘤

けられないケースも少なくないため、喫煙歴や血痰などのリスクを持つ方は『胸部CT』を3年に1回は受けたほうが万全です。『胸部CT』を受けた後の2年間は、レントゲンと喀痰検査の受診を勧めています」（同前）

などを発見できます。

年齢とともに脳の血管の動脈硬化のリスクは高くなるので、60代以降は1年に1回の受診が望ましい。脳の疾患は命に関わるため、可能であれば50代でも2年に1回程度は受けたほうが良いと考えられます」  
「沈黙の臓器」と呼ばれる肝臓のがんや、進行が速い

**胸部CTは55歳から、脳MRIは60歳から**

**胃カメラは？ 心臓MRIは？**

全部やらなきゃで医療費破産、  
まだ大丈夫だろうで重病見落とし

# める年齢」一覧年表

週刊ポスト

『週刊ポスト』次号(8月9日号)は7月29日(月)発売です

一部地域で発売日  
が異なります

膵臓がんの発見には、「腹部エコー」と「腹部CT」が有効となる。前出・宮崎医師は「60代からは年1回の受診が望ましい」と語る。「腹部エコー」では、肝臓が

がんの発見が難しい部位ですが、腹部CTなら、エコーでは映せない部分も映すことができます。罹患率や死亡率を考えると50代のうちに1回は受診したいところですが、加齢とともにリスクが増すため、60代からは毎年受診したい(同前)

前立腺がんの発見に役立つ血液検査である「PSA検査」も、60代以上の受診が重要という。「前立腺がんは、高齢者のがん」といわれ、とりわけ70代から毎年検査を受けておいたほうが良い。50代から罹患者は増加しますが、非常に進行が遅いがんなので、50代と60代のうちは、1と3年に1回ほど受診しておく(同前)

日本人の失明原因の1位である緑内障について、「70代からOCT検査(眼底三次元画像解析)」を受けておきたい」と解説するのは、二本松眼科病院の平松類医師だ。「緑内障を発症すると、薬や手術で進行を抑制する以外に対処法がなく、欠けた視野は二度と回復しません。従来の眼底検査では網膜の表面しか見られませんでしたが、OCT検査では、近

赤外線を使って網膜の奥の視神経の異常なども立体的に捉えることができます。緑内障は40代から20人に1人、70代以上10人に1人が発症しているという調査結果があり、できれば40代から5年に1回程度受診することが望ましいですが、少なくとも70代からは2年に1回程度受けるほうが良いでしょう」

## 検査がリスクになることも

70歳をすぎたら、検査を「減らす」「受けない」ことも選択肢に入ってくる。加齢に伴い、「検査の体力的負担」「検査費用や余命との兼ね合い」などの問題が生じてくるからだ。

前出・手塚医師がいう。

「50代後半から『胸部CT』を受け続けて異常が見つからず、喫煙歴もない場合は、医師と相談したうえで5年に1回程度の頻度に減らしても良い場合があります。『心臓MRI』も、50代から受け続けて全く異常がな

75歳 80歳 85歳

ピロリ菌検査が「陽性」であれば、3年に1回は受ける

80歳以上は偶発症のリスクが高まる

70代以降は5年に1回に減らす選択肢も(喫煙歴がなく、50代から受け続けて異常がない場合)

年に1回

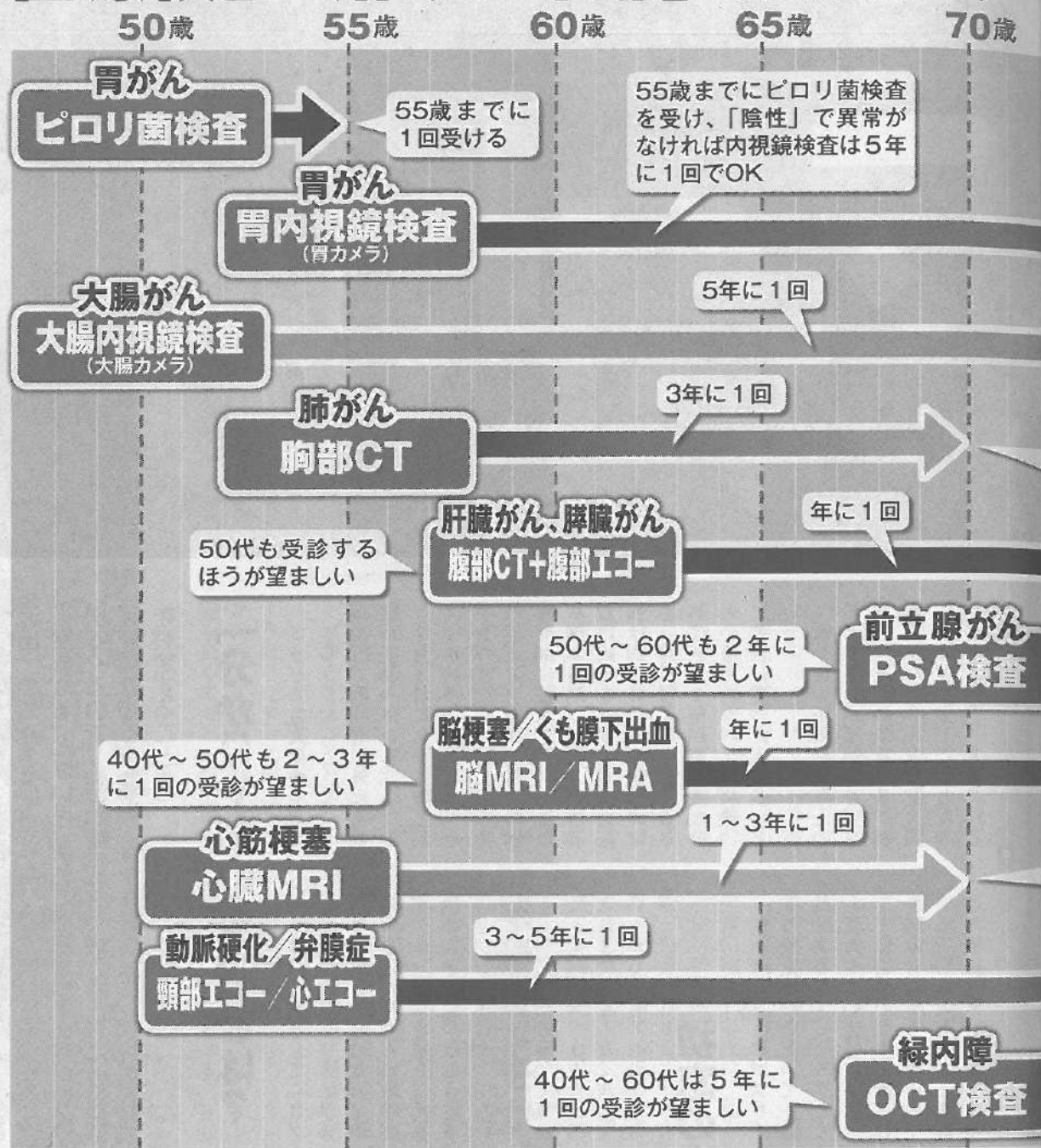
前立腺がんは進行が遅く、80代以降は直接の死因にならないケースも多い

70代以降は3～5年に1回に減らす選択肢も(異常がない場合)

80代以降は頸部エコーをやめる選択肢も(50代から受け続けて異常がない場合)

2年に1回

# 医療検査「始める年齢」「頻度」「や



ければ、正常な心臓の働きが維持できている可能性が高いので、頻度を減らすことも考えて良いでしょう」

80歳以降になれば、「主治医と相談のうえ、『大腸内視鏡検査』の中止を検討しても良い」（前出・倉持医師）という。

「大腸内視鏡検査は、受ける前には2月ほどの腸管洗浄液（下剤）を飲み、内視鏡を肛門から挿入する検査ですが、80代になると下剤を飲むことが困難になるうえ、腸管洗浄液によって腸管破裂などの偶発症のリスクが高まる。それまでの病歴を考慮したうえで中止を判断してもいい」（同前）

前立腺がんは進行が遅い病のため、80代以降の『PSA検査』も「かかりつけ医と相談のうえ、中止する選択肢もある」（前出・宮崎医師）という。

「備えあれば憂いなし」だが、ただ闇雲に検査を受けることは、病に対する正しい「備え」とはいえない。必要な年齢から、適正な頻度で受けることが肝要だ。